

新党日本代表 田中康夫 質疑
2011/02/18(金) 15:12~15:28

第177回国会(通常国会)
衆議院 予算委員会

参考人質疑(TPPについて)



さあ、信じられる日本へ。

新党日本
nippon-dream.com

○中井委員長 次に、田中康夫君。

○田中(康)委員 一昨日の予算委員会でも、日本は既に通商立国ですから開国済みでありまして、至らない点があれば改める改国を行うべきである。しかし猪突猛進であつてはこれは国を壊す、壊す壊国であるということを示し述べました。独立国家日本を二十一世紀の米連邦化の従属へと画策する羊の皮をかぶったオオカミ、トロイの木馬がTPPではなかるうかと思っております。

しかし、日米関係というのとはとても大事なことでございまして、とするならば、夫婦も親子も恋人も、相方が歩むべき道を見失っているときには、前向きな助言をしてあげてこそ真のパートナーではなかるうかというふうに私は思っております。にもかかわらず、残念ながら、喜々として封閣を務めているというようなのが現在のその日暮らし内閣であります、でありますから、国

民新党・新党日本の亀井静香も静かでないらしいということなわけでございます。

さて、久保田さん。日本経済団体連合会、そして日本商工会議所、経済同友会の、「TPP(環太平洋経済連携協定)交渉への早期参加を求める」という資料を御配付いただきました。

ところが、久保田政一さん、私の英語が不得手なわけではないと思うんですが、インターネットで、アメリカの多国籍企業のグループでTPPという項目を検索を入れても、ほとんど出てこない。これは、国家がインターネットを統制している中国と同じような状況に、アメリカがブロック経済化で陥っているのであるうか。なぜ、TPPという単語が検索で英語では出てこないのございましょうか、お教えください。

○久保田参考人 残念ながら、存じ上げません。

○田中(康)委員 皆様の傘下企業には多くのIT企業があると思しますので、ぜひお戻りになられたら大手町の新しい建物の中でごらんいただきたいと思うんです。

といたしますと、韓国も中国も実はこれは環太平洋でございます。間に日本海や東シナ海が入っているからおれたちは太平洋じゃないなどと言うわけもなくて、これはAPECに参加しているわけでございます。台湾も、あるいはロシアも参加しているんですね。

では、どうして、こんなにすばらしいと今菅直人首相がおっしゃっているTPPに韓国も中国も無関心なのか。韓国や中国というのは、久保田さん、これは愚かなのでございましょうか、あるいは

は疎いのでございましょうか、これもお教えください。

○久保田参考人 韓国は、既に韓米という二国間のFTA、これも署名してしまっていて、あと議会の批准を待っているところでございます。韓国は加えてEUともそういうものを結んでおりまして、夏にはもう発効するというところで、そういう意味で、韓国はアメリカとの、あるいはTPPという枠組みに今すぐ入る必要はない、こう考えているんだと思えます。

今後につきましては両論ありまして、韓国はいずれTPPに入ってくるという考え方と、いや、もうバイで、韓米というのでできているので入ってこない、両方あるので、そこはよくわかりません。

私も、日米についてもFTAができればやりたいと実は思っております。ただ、問題は、アメリカがもう二国間のFTAには関心がないということ、TPPというフレームワークにアメリカが乗ってきたという中で、私どもとしてはTPPに乗っていくべきだというふうに思っております。

中国については私ども真意はよくわかりませんが、中国の場合には、まずプライオリティーとしてはASEANプラス日中韓のフレームワークが重要なだろうということ、それをまず目指していくという方向が当面の中国の政策なのではないかというふうに考えているところでございます。

○田中(康)委員 今、久保田さんは大変に大事なことをおっしゃったと思うんですね。すなわち、

韓国はアメリカ、あるいはインドやEUや、こうした国とFTAやEPAを結んでいる、日本もその形はあるべきだと。恐らくそれは、ドーハ・ラウンドという多国間ものがマルチ、サイマルテナスにはいかなないという中で、二国間というのでFTAやEPAが出てきたわけでございますよね。

そうすると、日本の本来の政治の力があれば、あるいは、西高東低ならぬ、政治は低くて経済は高いと言われている政低経高が日本だというふうな大手町の方々が思っただけならぬ、なぜ経済団体は日本の政府に対して、あるいは霞が関に対して、FTAやEPAをきめ細かく何でやらないんだと。何でやらなかったと言われると、逆に武部さんからおしかりを、その政権時代というので……（発言する者あり）そうですね。

前原さんのように、前の政権のせいにするような口先番長ではございませんので、先に話を進めますと、なぜ経済団体はFTAやEPAということとはおっしゃらずに、TPPという、ほかの国がどこも言わないことに走っただけなのではないでしょうか。

○久保田参考人 先ほど御説明いたしましたけれども、経団連の通商政策、過去を見ていただきますと、まずWTOを推進すべきだということやってまいりました。ただ、ドーハ・ラウンドがなかなか進まない、もう十年近くたっていますけれども、なかなか決着しないということで、諸外国がそういったことも要因となつてバイあるいはマルチのFTAに重点を移しつつある。

我々としては、まさにWTOもそうですし、ASEANプラス3やASEANプラス6。先般、インドと調印できましたことは、我々も歓迎の表明を会長から出してあります。そういう形で、前から、WTOもそうだし、ASEANプラス3やASEANプラス6もそうだし、それからTPPもすべてやってもらいたいということで提言しておりますけれども、現状、今のところは動いているのはTPPのみ、こういう状況でございます。○田中（康）委員 先ほど来、FTA、EPAだけでなくTPPという、複線化ではなく複々線の中央線にしないみたいなお話かと思うんですが、あるいはEPAというハーフマラソンも満足に出場した経験のない素人が、突如いきがってTPPというフルマラソンに出るといっても、これは心臓麻痺は不可避なわけでございます、どんなにAEDの器械が小さな箱物行政で置いてあったとしても倒れちゃうんじゃないかと思うんです。

ですから、それだけ深いお考えを経済団体の方がお持ちならば、バスに乗りおくれるなTPPなのではなくて、今こそ韓国やほかの国に、悔しいけれども見習っていかうと何で行わないんだと。今おっしゃったように、一昨日のインドのEPAに関してもしばらしいとおっしゃった。では、なぜそれが対アメリカに対してだけは言えないのかという疑問を私は持つております。

実は、皆様御存じのように、また前回も申し上げたように、TPP交渉参加九カ国に日本を加え

た各国のGDPというものは、アメリカがその全体の七割くらい、日本が二〇%、オーストラリアが五%で、残りの七カ国で五%でございます。ですから、ここは大事なことは、アメリカが七割、日本が二割と、二国間だけでTPP交渉参加国のGDPの九割を占めてしまっているということです。ですから、TPPに入ると日本の貿易がよりすばらしい未来が来るというのは、私はそうではないんじゃないのかと。

すなわち、実質的な輸出国はアメリカと日本しかない。シンガポールという国は、非常に金融で、そして親子で政権を担うという、自由主義圏の北朝鮮に似たような側面がございますけれども、そのほかの国は、最初に参加した国はみんな一次産品国だ。石油あるいはレアアース、レアメタル、あるいは酪農、畜産という一次産品国で、そのほかの二次産品等はみんな輸入する国だから、これはメリットがあらわれようかと思えます。

そして、アメリカはなぜこれに参加しようとしているかというと、私は恐らく、バラク・オバマ大統領自身が貿易黒字国がアメリカへの輸出に依存するのは不健全だと言明されているわけで、すなわち、ブラジルであったり、インドであったり、中国であったり、新しい経済の国が出てくる中でアメリカの覇権というものが失われつつあるときに、このTPPによつて失地回復をしようとする。

しかし、そのときに、日本はパートナーであるわけですから、あるいは日本はアメリカとは夫婦関係だと言っているわけですから、なおのこと、この点に関して考え直すべきではないかとい

うふうに思っております。

久保田様ばかりやっているで大変に失礼かもしれませんが、では、堀口さんと萩原さんに。

TPP交渉参加国の中に、アメリカ、オーストラリアも入れて、日本と利害が一致する国というのは果たしてあるのでしょうか。シンガポール、ブルネイ、チリ、ニュージーランド、ペルー、ベトナム、マレーシア、オーストラリア、アメリカという国の中に日本と利害が、交渉というのは、利害が一致する国と一緒に共闘がとれません。その点に関して、ちよつとお教えいただけますでしょうか。

○堀口参考人　そういう観点で見てもおりませんでしたけれども、多分、二国間で交渉をする場合には、その九カ国の中にも十分可能性がある国はあると思います。アメリカとのFTAはどうするかというようなことは、極めて難しい交渉になるであろうと思います。

ただ、一方で、このTPPそのものに日本が大きく関与すること自体が、逆に、EUとのFTAなり、あるいは東アジアの関係をむしろマイナスにしてしまう、そういうサイド効果があるように僕は思います。

○萩原参考人　日本と利害が一致するという意味でございますけれども、私は田中先生の御意見と一致いたしております。

要するに、今までFTAという形で地道な、自主権を尊重しながら貿易を広げてきたこの路線、これをやはり追求するということが非常に重要なポイントだと思います。

個別的な国に関して調べているわけではございませんけれども、それはやはり、その国その国の状況、そしてその中でどう自分たちの国のあり方、貿易で重要なものは、自分たちは自主権があるんですから、自分の国のあり方というものをきちんと押さえて、その中で貿易を進めていく、これが私は非常に重要だと思っております。

それに対して、このTPPというのは、田中先生と意見が一致すると思えますけれども、極めて乱暴なやり方で、一気にそれを全部自由という形にやるというのは、やはりやり方として大変まずいのではないかとこのうふうに思っております。

○田中(康)委員　恐らく、おっしゃるとおりで、アメリカと並んで日本だけが外需依存度が最も低いという形ですから、他の国が一次産品国でありますから、そしてアメリカは黒字国が輸出をふやすなどと言っているわけでございますから、これは日本にとつては隘路ではないかと私は思っております。

久保田さんに改めてお聞きしますが、TPPは、単に農業とかそういう話だけでなく、公共入札であつたり、いわば、英語で表記していない小さな村の公共入札のホームページは非関税障壁だと言われるんじゃないかと思つているんです。電波というようなものに関しても、テレビも含めて、ルパート・マードックがたくさん入ってくるような非関税障壁化が行われるんじゃないかと思つてます。

経団連としては、こうした電波というものも、

外国の方々、外資の方々が入ってきて開かれることが、日本の記者クラブ制度を打破する黒船だというふうにお考えなのか、この辺も御見解をお聞かせください。

○久保田参考人　私どもはそういうふうには思っておりません。

ただ、現在のP4で行われているTPPの交渉を見ますと、そういう問題が今のところ話題になつていないことではありませんし、バイの話は、当然、日米のいろいろな話というのは引き続き、このTPPとは並行しながらいろいろな経済対話が進められていく、そういう中でアメリカの要求というのはいろいろ引き続き出てくるんだらうと。それについては是非々々やっつけていくべきだというふうに考えています。

TPPの場合は、日米だけじゃなくてほかの国も入っていますので、そういう国全体としてまとめていけるルールづくりということですので、そういう観点からも、TPPに、いろいろ懸念するところ、わかるところもありますけれども、過度な心配というか、そういうことは今の時点ではないのではないかとこのうふうに考えております。

○田中(康)委員　しかし、これは例外ないというふうに言明して始まったものでございますから、例外をつくつてくださいますか、つまり、真っ裸でまずは参加しなさいと言つているわけですから、フルマラソンに真っ裸で参加すると、それだけでわいせつ罪になるんじゃないかと私は懸念しているんですけれども。

ですから、ちよつと今のは大変に楽観的で、そ

のようなお公家さんのような、公家の方がもつと
いろいろ画策したんじゃないかと思うので、ちょ
っと心配でございます。

その点でいえば、逆に医療ツーリズムというの
も、例えば、子供が肺炎をこじらせて、救急車で
たらい回しになっているような医療崩壊が起きて
いる国に、いや、海外の方の医療を見なくていい
と言っているんじゃないやありません。国内の医療が崩
壊しているときに、外国からもうかりそうな方が
来るから、自分の息子を横に置いて、そっちの外
国の金持ちの息子を診ようというのは、これは倒
錯したボランティア精神でございまして、これこ
そ自虐史観になりかねないのではないかと私は思
っております。

いずれにいたしましても、TPPは、まさに羊
の皮をかぶったオオカミである。その前に、原則
に戻ってFTA、EPAを行うべきだと思いま
すし、また、山下さんにおかれましても、広い議論
をして国民的など言っている間にこれはどんだん
動いていってしまうわけでございますから、こう
いうことを言っているのは、手続民主主義の市民運
動家の敗北主義になってしまいます。菅さんや仙
谷さんもそうではなく、内ゲバを起こしても勇
猛果敢に戦おうと。それがすばらしいかどうかは、
亀井静香は悩んでおりますが。

やはり生協活動におかれても、皆さんに情報を
提供してなどと言っている間に世の中は動いてし
まいますので、この問題はまず五感で感じていた
だいて、やはりこれは日本の滅亡する壊国だとい
う点で山下さんにも御意見をきちんと述べていた

だけの勇気を期待し、また経団連の方々にも、聡
明なる経済界のリーダーシップを国民のために、
日本のために発揮していただけるようお願いを
いたしたいと思えます。

どうもありがとうございます。

○中井委員長 これにて田中君の質疑は終了いた
しました。